

木曜日の正午、豊見城市や近郊でラジオの周波数を83・2がツルに合わせるよ、「ゆがふー」幸人の民謡で「びる」が流れてくる。

たどたどしい口調も交じるが、元気な若い声が沖縄民謡とともに響く。パーソナリティーは、ダウン症の十七歳の赤嶺幸人君。七月から地域コ

今晚の話題



ミュニティー放送局「FMとよみ」で、一時間の生番組を担当している。親せきの同局アナウンサーが橋渡しして、マイクの前に座った。

幼いころから民謡が大好きだった。三年前からは自宅のある南風原町の民謡研究所に通い、三線をつま弾き、太鼓の響きを楽しんでいる。民謡

★「民謡で一びる」

関係の知り合いが増え、町内のイベントにも度々登場。南風原では「ちよっと知られた存在」（母親の春枝さん）だという。このため番組では、幸人君がダウン症だということとは伝えていない。

「少しだけ、緊張するけどみんなのアドバイスをもらって、いつも楽しくやっていく。曲の紹介の時はどんなふうに話せばいいか、工夫しています」。幸人君の声は弾んでいる。春枝さんも「この子には生まれ持った何かがあるから、リスナーも聞いてくれると思う。病気があるとかは心配してはいない。普通の人と一緒ですよ」

番組が終わると、すぐに次週のことを気になると笑う幸人君。「これからも頑張ります」。元気を電波に乗せていく。

(金城雅貴)

2008
8/5(火)
沖縄
44ス